

# 「常用漢字表」改訂に関する研究 — 常用漢字表から削除された漢字の辞書掲載状況の分析 —

野崎 浩成\* 江島 徹郎\* 梅田 恭子\*

\*情報教育講座

## The Surveys of *joyo kanji* (general-use kanji) Usage in Japanese Dictionary and Web Site

Hironari NOZAKI\*, Tetsuro EJIMA\* and Kyoko UMEDA\*

\*Department of Information Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 1. はじめに

平成22年、「常用漢字表」は大規模な改訂がなされることとなった(文化庁文化審議会2010)。この改訂で、現行の常用漢字1945字から5字を削除し、新たに196字を加える旨の答申がなされた。常用漢字表は、法令・公用文書・新聞・雑誌・放送等、一般の社会生活で用いる場合の、効率的で共通性の高い漢字を収め、分かりやすく通じやすい文章を書き表すための、新たな漢字使用の目安となることを目指したものである。常用漢字表については、次に示すような漢字表であると位置づけている。すなわち、科学、技術、芸術その他の各種専門分野や、個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない。ただし、専門分野の語であっても、一般の社会生活と密接に関連する語の表記については、この表を参考とすることが望ましい。固有名詞を対象とするものではない。ただし、固有名詞の中でも特に公共性の高い都道府県名に用いる漢字及びそれに準じる漢字は例外として扱う。過去の著作や文書における漢字使用を否定するものではない。運用に当たっては、個々の事情に応じて、適切な考慮を加える余地のあるものである、などしている。

常用漢字表に掲載される漢字の選定基準は次の通りである(文化庁文化審議会2010)。すなわち、教育等の様々な要素はいったん外して、日常生活でよく使われている漢字を出現頻度数の調査結果によって機械的に選ぶとしている。主に特定の固有名詞でのみで使用されているという理由で、これまで表外字(常用漢字以外の漢字)とされてきた「阪」や「岡」などについても、出現頻度数が高ければ、それらの漢字は排除しない。使用頻度が低い漢字であっても、文化の継承という観点から、一般の社会生活に必要と思われる漢字については取り上げていく。漢字教育の観点から、漢

字の構成要素を知るための基本となる漢字も取り上げていく。すなわち、「日常生活でよく使われている漢字」を基本として、上記で述べられている項目についても配慮しながら、単に漢字の出現頻度数だけではなく、様々な要素を総合的に勘案して選定していくことを基本方針としている。

さらに、「日常生活でよく使われている漢字」を選定するにあたっては、新聞、Webサイト、書籍などを対象とした漢字の出現頻度数調査を行い、これらのデータなどをもとに、常用漢字表に入れるべき漢字かどうかを判断したとされている。

その一方で、今回の常用漢字表の改訂で、新たに追加された漢字(196字)や削除された漢字(5字)の使用状況やその特徴を計量的に分析した研究は十分に行われていないといえる。

そこで、本研究では、現行の常用漢字表から削除された漢字5字を対象に、その特徴を計量的に分析する。さらに、今回の改訂で新たに追加された漢字との比較を行うことで、常用漢字表への字種の追加・削除が妥当なものなのかを検討するための基礎的な資料を提供する。そして、本研究で得られた知見は、小中学校や高等学校における漢字の教育についてのカリキュラム開発や、学年別漢字配当表や教育漢字の妥当性を検討する上でも重要な基礎的データとなり得るものである。

### 2. 常用漢字表から削除された漢字5字についての分析

表1に、今回の改訂により、常用漢字表から削除された漢字5字を示した。データの信頼性を確保するために、異なる出版社から刊行されている複数の辞書から得られたデータを掲載した。今回用いた辞書は、「岩波国語辞典 第三版」(1983)および「角川新字源(135

表1 現行の常用漢字1945字のうち、今回の改訂で常用漢字表から削除されることになった5つの漢字の辞書掲載内容

勺	[音訓] シャク
	[意味] ひしゃく。くむ。わずか。少量。 容積の単位（一合の十分の一）、 土地の面積の単位（一坪の百分の一） 五味の調理しているさま。 うまのあしがた科の多年草。
	[用例] 特に用例は掲載されていない
匁	[音訓] もんめ
	[意味] もんめ。 重さの単位（一貫の千分の一） 江戸時代の貨幣の単位 （小判一両の七十分の一）
	[用例] 特に用例は掲載されていない
脹	[音訓] チョウ（チャウ）、ふく-れる
	[意味] ふく-れる（ふくる） 腹が張ってふくれる。「脹満」 物がふくれる。 はれる。皮膚がはれる。「腫脹」
	[用例] 脹れる（「膨れる」という見出し語の中での説明）
錘	[音訓] ツイ（ツキ）、スイ（スキ）、つむ、おもり
	[意味] おもり。はかりのおもり。分銅。重量の単位。 八銖または六銖のめかた。十二両の重さ。 たらす。 金属をきたえる道具。 つむ。糸をつむぐ道具。糸によりをかけながらまき取る、紡績機械の付属品。
	[用例] 鉛錘、紡錘、五万錘
銚	[音訓] セン、ずく
	[意味] 小さいのみ。 つやのある金属 金属の光沢。 鐘の口の両かど。 そそく。 ずく。ずくてつ。銚鉦をとかした、鋳物に使う鉄。質がもろくて折れやすい。「銚鉄」
	[用例] 銚鉄、高炉銚、白銚、熔銚

版）」(1979)であった。以下では、前者を「辞書①」、後者を「辞書②」と表記することとする。表1で、[音訓]は「辞書①」と「辞書②」に掲載されているものを全て示した。また、[意味]は「辞書②」のものを、[用例]は「辞書①」のものを、それぞれ用いることとした。

表1を作成するにあたり、以下に示す点が明らかとなった。(1)「匁」は、「辞書②」では表1にある通り「小判一両の七十分の一」とあるが、「辞書①」では「小判一両の六十分の一」となっている。(2)「勺」「匁」については、熟語としての用例が「辞書①」には掲載されていない。「勺」「匁」の2つの漢字は単位としての意味も持っているため、辞書の本文中で述べられ

ている一勺や一匁という表現で十分に説明できると辞書の編者が考えたからではないかと推察される。(3)「脹」については、「辞書①」において、「漢字母項目」として掲載されていない。「膨れる」という見出し語の中で、「脹れる」が掲載されているにとどまっている。すなわち、これは常用漢字であるにも関わらず、国語辞典の「漢字母項目」として掲載されていない漢字が存在していたということの意味している。このように、「脹」は辞書①の「漢字母項目」にさえなっていなかったことから、今回の改訂で削除対象の漢字になったことはある程度理解できる。

現行の常用漢字1945字のうち、今回の改訂で常用漢字表から外されることとなった漢字5文字については、表1の結果などから次のような特徴がみられる。すなわち、(1) 今日的生活では利用される機会が極めて少ない単位を表す漢字（「勺」「匁」の2字）、(2) 他の表記で置き換えて表記される事例が多いと考えられる漢字（脹れる=>膨れる、錘=>おもり）、(3) 日本の近代を支えた主要産業の1つであった「紡績」や、日本の伝統的な職人文化である「鍛冶」に関連する漢字（紡錘、銚鉄などで使われている「錘」「銚」の2字）、などが挙げられる。

このように、表1にある5つの漢字は、時代の変遷とともに、日常生活における使用頻度が低下したと考えられるため、常用漢字表から削除される漢字となったと推察される。

ところで、表1に示した「勺」「匁」「脹」「錘」「銚」の5つ漢字は、上述した通り、本当に使用頻度が低下しているのだろうか。次節では、これら5つの漢字は「日常生活における使用頻度が低下した」のかを検証することにした。本研究では、Webサイトにおける漢字の使用実態を調査することを試みた。

### 3. Webサイトにおける漢字の使用実態調査の試み

#### 3.1 先行研究の概要

漢字の使用頻度を調査した代表的な研究の1つとして、野崎・横山ほか(1996)が挙げられる。野崎・横山(1996)は、電子化された新聞記事の朝夕刊1ヶ年分のデータを調査対象として、漢字、平仮名、片仮名についての文字使用頻度表を作成し、漢字の使用実態を明らかにした。野崎・横山ほか(1996)の研究において、最終的に分析の対象となった新聞記事は約11万件、文字総数は約5,500万文字に達し、これまでになされた文字使用頻度調査のデータ数では、その当時、国内最大規模となるものであった。

野崎・横山ほか(1996, 97, 98, 2000)が中心となっていた漢字の使用頻度調査は、計量的なデータに基づいた「客観的な指標」と考えられる。その一

方で、ある漢字が被験者に提示された時に、その漢字をどの程度よく目にするものなのかを被験者が評定したデータとして、「親密度 (familiarity)」がある。天野・近藤 (2003) は、提示された単語に対しての親密度を収録したデータベースを公開している。これは被験者が提示された刺激に対するなじみの度合いを7段階で評定 (7:なじみがある, 1:なじみがない) したものであり、その平均値がデータとして収録されている。刺激の提示方法は、音声提示時、文字提示時、音声文字同時提示時の三つの場合がある。

このように、「親密度」は被験者が評定した心理学的な属性値であり、人間が判断した「主観的出現頻度」と位置づけることができよう。一方、野崎・横山ほか (1996) の研究で得られた使用頻度は、統計データに基づいて集計された「客観的出現頻度」といえる。そして、「客観的出現頻度」(接触頻度)と「主観的出現頻度」(親密度)の2者の関係については、「接触頻度→なじみ→親密度」へと結び付いていくというモデルが提案され、そのモデル式の妥当性も検討されている (横山2006)。一般に、親密度と使用頻度は相関があるとも指摘されている (近藤ほか1996)。

上述したように、これまでの研究では、漢字の使用頻度調査は新聞を対象に大規模に行われてきている。本研究では、これらの先行研究では調査対象として扱われていないWebサイトにおける漢字の使用実態を調査することを試みる。

## 3.2 方法

この調査の最終目的は、今回の改訂で常用漢字表から削除された漢字のWebサイト上での使用実態を明らかにすることである。今回は、その調査の第一段階として、検索サイトを用いて、Webサイトにおける漢字の検索結果 (ヒットした件数) を分析することとした。こうして得られた件数は、Webサイトにおける当該漢字の出現頻度を反映したデータであると考えられる。

### 3.2.1 材料

Webサイトにおける漢字の使用実態を調査するために、検索サイトを利用することとした。今回、分析の対象となった検索サイトとして、Googleを用いた。Googleを用いた理由は、ウェブページの検索において、世界的規模で高いシェアでの利用がなされていると考えられるからである。

調査の対象となった漢字は、次に示す (1) から (3) である。なお、今回の改訂で常用漢字表から削除された漢字5字はすべて調査することとした。

- (1) 今回の改訂で常用漢字表から削除された漢字5字 (勺, 匚, 脹, 鍾, 銑)
- (2) 今回の改訂で常用漢字表に新たに追加されるこ

とになった漢字196字の中から5字 (彙, 挨, 撈, 傲, 凄)

- (3) 常用漢字4字 (愛, 知, 教, 育)

上記 (2) の漢字については、語彙 (ごい), 挨撈 (あいさつ), 傲慢 (ごうまん), 凄惨 (せいさん), 凄 (すごい) など、新常用漢字追加漢字196字の中から比較的使用頻度が高いと推察できる漢字5字を筆者が選定した。また、上記 (3) は日常的によく使われていると考えられる常用漢字4字である。

### 3.2.2 手続き

調査は2011年9月9日13:30 (第1回目) および同年9月12日12:00 (第2回目) に実施した。調査を2回実施した理由は、検索データの妥当性および再現性を確認するため複数回調べるのが適切であると考えたからである。上記で示した材料 (1) ~ (3) の漢字14文字について、検索サイトGoogleを用いて情報検索をした。漢字14文字をそれぞれ単漢字として検索キーワードに入力した。検索条件の詳細は次の通りである。

- ・言語: 日本語
- ・ファイル形式: すべての形式
- ・日付 (ページの最終更新日): 24時間以内
- ・ライセンス: ライセンスでフィルタリングしない
- ・検索対象の範囲: ページ全体
- ・地域: 日本
- ・セーフサーチ: OFF

なお、セーフサーチとは、セーフサーチフィルタを用いることで、アダルトコンテンツなど不快なサイトを検索結果から除外することができるものである。

### 3.2.3 結果と考察

表2には、今回の改訂で常用漢字表から削除された漢字5字 (勺, 匚, 脹, 鍾, 銑) について、検索結果を示した。表2より、「銑」のように、平均43.0件というものがある一方で、「匚」「鍾」は平均で440件を超えている。このように、今回の改訂で常用漢字表から削除された漢字5字であっても、その検索結果 (件数) には大きな開きがあり、10倍以上も異なっている漢字が存在することが明らかになった。さらに、「勺」「匚」「脹」「鍾」の4文字は平均で100件を超えているが、「銑」については、他の4文字に比べて極端に低いことが示された。

表3には、今回の改訂で常用漢字表に新たに追加されることになった漢字196字のうち、「彙」「撈」「挨」「傲」「凄」の5字の検索結果 (件数) を示した。表3に示した漢字5字は、常用漢字表に新たに追加されることになった漢字であるため、検索結果 (件数) は、表2

表2 今回の改訂で常用漢字表から削除されることになった漢字5字「勺」「匆」「脹」「錘」「銑」の検索結果(件数)

漢字	9月9日 (1回目)	9月12日 (2回目)	平均
勺	334	339	336.5
匆	773	248	510.5
脹	121	99	110.0
錘	500	395	447.5
銑	47	39	43.0

表3 新常用漢字表追加漢字196字のうち、「彙」「撈」「挨」「傲」「凄」の5字の検索結果(件数)

漢字	9月9日 (1回目)	9月12日 (2回目)	平均
彙	68	57	62.5
挨	168	240	204.0
撈	84	57	70.5
傲	152	164	158.0
凄	133,000	122,000	127,500.0

の漢字よりも大きくなることが予測されたが、必ずしもそうではないことが分かった。すなわち、「彙」「撈」は平均しても100件に満たないため、表2の漢字よりも件数が高いとはいえない。つまり、常用漢字表に新たに追加された漢字であっても検索結果(件数)が十分に大きいとはいえない漢字が存在することが示された。その一方で、「凄」のように平均で、約12万7千件にも達するような漢字があることが明らかになった。このように、新常用漢字表に追加された漢字であっても、検索結果(件数)には大きな開きがあり、常用漢字表から削除された漢字よりも件数が低いものや、著しく件数が高いものもあり、その検索結果(件数)のバラツキはとて大きいといえる。

表4には、常用漢字表にある漢字4字の検索結果(件数)を示した。「愛」「知」「教」「育」の4文字の検索結果(件数)は、いずれも著しく高いことが示された。これらの結果から、表4にある漢字は、日常的によく使われていると考えられる常用漢字である、とする推察はある程度妥当であったとも考えられる。さらに、表3と表4の結果を比較すると、「凄」(表3)は、表4に示した常用漢字4字に匹敵するほどの検索結果(件数)が高いことが明らかになった。

このような結果から、「凄」という漢字は、Webサイトにおける使用頻度が著しく高いと推察されるにも関わらず、常用漢字表には掲載されていなかった漢字(表外字:常用漢字以外の漢字)であったことが明らか

表4 常用漢字4字「愛」「知」「教」「育」の検索結果(件数)

漢字	9月9日 (1回目)	9月12日 (2回目)	平均
愛	2,040,000	1,870,000	1,955,000
知	984,000	790,000	887,000
教	249,000	246,000	247,500
育	220,000	150,000	185,000

になった。そのような「凄」という漢字が今回の改訂で新たに常用漢字表に追加されたというはWebサイトの使用頻度という面から見ると妥当な結果であったといえる。

#### 4 まとめと今後の課題

本研究では、最初に、常用漢字表の改訂により、常用漢字表から削除されることになった5つの漢字について調査した。その結果、削除された5つの漢字は、日常生活で利用される機会が少ない単位(「勺」「匆」)を表すもの、他の表記で置き換えて表現可能なもの(脹れる=>膨れる、錘=>おもり)、近代日本を支えた主要産業「紡績」や、伝統的な職人文化である「鍛冶」に関連する漢字(紡錘、銑鉄などで使われている「錘」「銑」の2字)、などが挙げられる。さらに、常用漢字表から削除された5つの漢字については、Webサイト上での検索結果(件数)には大きな開きがあり、10倍以上も異なっている漢字が存在することが分かった。さらに、新常用漢字表に新たに追加された漢字であっても、検索結果(件数)の平均が100件にも満たない漢字(「彙」「撈」)が存在する一方で、「凄」のように約12万7千件にも達するような漢字が存在することが明らかになった。

今後取り組むべき課題は次の通りである。(1) 今回の研究で分析の対象となったのは、常用漢字表に新たに追加された漢字196字のうち5字のみである。まだ分析がされていない残りの191字についても同様な分析を行う必要がある。(2)表1から表4で示した漢字については、親密度など他の心理学的な指標と比較し、どのような特徴があるのか分析すべきである。(3)特に、表3に示したような常用漢字表に新たに追加された漢字については、今後も継続的な調査に取り組む必要がある。すなわち、常用漢字表に新たに追加されたことにより、表3に示した漢字については、今後学校教育の中で積極的に扱われることとなる。また、新常用漢字表追加漢字は、書籍や新聞、教科書、インターネット上でも使用される頻度が高くなると推察されるからである。このように常用漢字表の改訂は、我が国の学校教育や言語生活に多大な影響を及ぼすものと考え

えられるので、今後も調査を拡大し、精度の高い分析を行っていく必要がある。

### 参考文献

- [1] 文化庁文化審議会 (2010) 改定常用漢字表 [http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/pdf/kaitei\\_kanji\\_toushin.pdf](http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/pdf/kaitei_kanji_toushin.pdf)
- [2] 文化庁文化審議会漢字小委員会 (2008) 漢字出現頻度表 順位対照表 (Ver. 1.3).
- [3] 野崎浩成, 横山詔一ほか (1996) 文字使用に関する計量的研究: 日本語教育支援の観点から, 日本教育工学雑誌, 20 (3), 141-149
- [4] 野崎浩成, 横山詔一, 近松暢子 (1997) 新聞と雑誌における漢字使用頻度の分析, 日本教育工学雑誌, 21, 21-24
- [5] 野崎浩成, 清水康敬 (2000) 新聞における漢字頻度特性の分析とNIEのための漢字学習表の開発, 日本教育工学雑誌, 24 (2), 121-132
- [6] 横山詔一 (2006) 意思決定理論を援用した漢字研究, 日本語学, 25 (11), 105-114, 明治書院, 東京
- [7] 横山詔一, 笹原宏之, 野崎浩成, エリク・ロング編 (1998) 新聞電子メディアの漢字, 国立国語研究所プロジェクト選書1, 三省堂, 東京
- [8] 天野成昭, 近藤公久 編著/NTTコミュニケーション科学基礎研究所 監修 (2003) 日本語の語彙特性 第1期-第2期 CD-ROM版, 三省堂, 東京
- [8] 近藤公久, 天野成昭ほか (1996) 漢字の親密度と出現頻度の相関 日本心理学会大会発表論文集601
- [10] 小川環樹ほか編 (1979) 角川 新字源, 135版, 角川書店, 東京
- [11] 西尾実ほか編 (1983) 岩波国語辞典, 第三版, 岩波書店, 東京

### 附記

本稿は、愛知教育大学「2011年度大学教育研究重点配分経費」(公募分野2【研究発展分野】)プロジェクトNo.5, カテゴリー2 研究テーマ「新常用漢字に関する言語学的研究」(研究代表者 野崎浩成)の援助を得たことによって進められた研究成果の一部をまとめたものである。本プロジェクトを進めるにあたり、本学の松田学長をはじめ、関係する教職員すべての皆様に感謝の意を持ってここに附記します。

(2011年9月13日受理)